

特集

子どもの 神性と野性

生命の指標(らいふ・いんどきす)は我が内にあり

「児童」後の子ども達への児言態の実践

宮田雅智

はじめに — 家庭教師としての教育実践 —

私は十年ほど小学校に勤めたのち体を壊し平成九年からは家庭教師として主に中学生や高校生と接している。体を壊してしまったことは残念であったが、教育を考える上では案外怪我の功名とも言えるべき事が多い。何よりも意義深いのは下は小学生(時には幼児)から上は高校生と日替わりで様々な世代の子ども達と接することができた事である。しかもその中にはかつて小学校の頃に担任した事のある子ども達が何人も含まれていた。そのためにより長い成長の期間から自分が実践してきた事の意義を考察できるようになったのである。そこで今回は「自分の存在意義」を追求し始める中高生と関わりながら上原輝男先生の師である折口信夫博士の

「生命の指標(らいふ・いんどきす)」という仮説を上原先生の心意伝承の点から考え児言態的に実践してきた事の概略を紹介してみたい。そしてその中で本号の特集である「神性」と「野性」に関した私見も述べてみたい。

*文中の名前はすべてペンネーム、学年はそのスナップを記録した当時のもので記述している。活動の一端を「ワニワニ学級」というホームページに掲載している。 <http://www2.plala.or.jp/WANIWANI/index.html>

また、実践記録という性格上、文献の引用などは最低限にとどめてある。もう少し詳しい注釈・引用や上原先生の特集も同ホームページ内の「学問のお部屋」に記載しているので参照されたい。

神と交わる子ども

・1・

始めに断っておくが、本研究会の主宰でもあった上原輝男先生が民俗学の観点から教育の問題を追求してきた関係上、この項目名のように神に関わる言葉が登場するが、それはある特定の宗教のいう神を指しているわけではなく、まして児言態の会員が復古主義的な教育を目指しているからでもない。

子どもが自然な気持ちで純粋に言葉を表出するほど「神」や「あの世」など神秘的な世界と関わる内容が登場してくる。そうした事は、日本各地でいまだに残る習慣や伝統行事をみても分かる通り、日本人として自然な姿である。児言態(児童の言語生態研究会)は子どもたちの純粋な生態・生き様を基本にすえて教育を考えている。そのためにこの

歴史と風土の中で成長していく子どもたちの教育を考える上で「神性」を真正面から取り上げることが不可欠なのだと考えている。

児言態の神のとらえ方で一番誤解が少ないのは「となりのトトロ」「もののけ姫」「千と千尋の神隠し」などのアニメ映画で宮崎駿監督が扱っている感覚である。宮崎アニメを観ている時の子どもたちの目の輝きは「神性」と「野性」からくるものと言えよう。

同様に「日本人らしさ」などの言葉も他の民族を排他的に考えて使っているのではない。「子どもの生態」をつかまえようとしていくと、どうしても「日本人らしさ」と括って捉えた方が整理しやすいある種の偏向性が生得的に認め

られるためである。

*このあたりの事を上原先生は「感情教育論（昭和五八年学陽書房）で詳しく述べている。

さて児童後の子ども達と副題についておきながら最初の事例は三歳児のデジモン君である。当時から2だったお姉さんを教えた縁で子守役を何度もさせて頂いた子どもである。

☆スナップ1

平成十二年度 3歳男子

デジモン君の両親やお兄さんたちと香取神宮に参拝した時のこと。はじめに利根川の河川敷にある大鳥居に案内した。そこからの眺めを味わった後、奥の宮に出発しようとしたら、いつもはお母さんから離れずにいようとするデジモン君がお母さんの手を振りきって大鳥居前の階段に戻っていった。そしてジーンと川向こうを見つめている。「もう行くよ」と呼んでも動こうとしない。そのうちお母さんが連れて行こうと抱きあげるとポロポロと涙を流し始める。

本人の気持ちを包み込むようにお母さんはしばらく抱っこしていた。

奥の宮に着いた頃は笑顔に戻ったデジモン君。私が「さあ、ちゃんとデジモン君も神様に挨拶してごらん。初めまして、デジモンです、つて」というとデジモン「ちがうー」ときっぱり。「じゃあ、神様おひさしぶりです、なの？」と聞くとデジモン「うん！」

とにつこり笑う。両親は「すごいことを言うね！」と感心する。

☆スナップ2

それから約半年後、再びデジモン君も交えて香取神宮へ行った。途中休憩をとりながらだったのだが、「さあ、今度は香取銀宮だよ」と言う満面の笑みで

デジモン「ヤッター！」

お父さん「どんなところだったかちゃんと覚えてるの？」

デジモン「覚えてるよー！」
そして大鳥居のある土手が見えてくると、自分を押さえきれずに後ろの座席からシートごしに前に乗り越えていく。

そして車が止まるやいなやお母さんを気にしないでニコニコ顔でトコトコと駆け出し、土手を四つんばいで上りだした。

大鳥居前の階段に立ったデジモン君。離れた所にいる私に大声でデジモン「ボクね、ずっと前にね、ここにいたんだよ！ それでこうやって（両手をクルールの様にまわしながら）いつも泳いだの！」

このスナップでは輪廻転生の発想を幼いデジモン君が無意識に語ったとい

「世界定め」をする軸の設定

・2・

発言態で前回特集した「子どもにとしての時間と空間」について上原先生は「世界定め」としてこう話していた。

「歌舞伎の世界定めの話から」脚本でも芝居でも時と場所と人を設定することで世界を作る。場面を変えるのはこの三つの設定を変えていくこと。」（平成六年十二月）

「自分の意識が世の中を作っている。イメージの時間・空間・人間（ジンカン）によってどんな世の中が思い描けるようになっていくか。」（平成七年一月）
「時間・空間のイメージの設定が変化してしまっただけに教育の歪みが起きて

う点も大切であるが、特に注目しておきたいのはデジモン君を包み込んでいる御両親の自然な雰囲気である。

私は現在、今回のテーマである「神性」を本来子ども達が生得的に心の中に持っている世界、「野性」をその世界に回歸しようとするエネルギーのようなものと考えている。そしてこれらの「神性と野性」が幼い頃からの周囲の対応の仕方によって大きく左右されることは容易に想像がつく。（この点については終章でもう一度触れる）

一頃「プラス思考」という言葉が盛んに使われたが、私は何か小手先で思考の方向を操作するようなレベルで済ませてしまうような気がするのであまり用いていない。受験や友人関係で本当に悩んでいる子ども達に「プラス思考



で」と言ったところで「わかってるよ！でもわかっていてもどうにもならないんだよ！」と余計に追いつめてしまうのが関の山である。実際そうした親子の対立は何度も目になっている。

世界定めは意識の軸のとりかたそのものが変わりその子本来の形に近づくために、同じ環境の受け止め方が深い部分で変容する。「ハッとする」目から鱗」というあの気分が伴うのである。それを上原先生は「構えの変革」とか「トランスフォーメーション（意識の転換）」等と呼んでいた。

そうした「世界定め」の意識について子ども達がどのように捉えているのかを知るために、歌手の浜崎あゆみさんのWhat Everという曲のプロモーションビデオを用いて「どうしてこういう設定でビデオを作りたくなつたのだろうか？」と問いかけた。破壊しつくされた町の廃墟を天使が歩き回っているがやがて天使は有刺鉄線からまって動かなくなってしまう。浜崎は有刺鉄線がはられた鳥かごのような檻の中に閉じこめられた状態で涙を流している：そんな内容のビデオである。（スナップ6まで平成十三年度）

☆スナップ3

中2女子

ゆでたまご「その針金みたいのにから

まって死んでいるのが現代っていうか今の：私の説ね：今自分の方向を見失っている若者がいっぱいいるじゃない。で、死んじやってるわけよ。それで浜崎は助けたいんだけど自分からは行けないみたいなの。」

☆スナップ4

中2男子

アントラーズ「絶望感の文章を読んで」自分がこういう想いだから寂しい。：閉じ込められてるような。：だから檻に閉じこもった：自分でね。（檻は）心が：自分の心で作って：」ホーリーホック「こういうのを夢で見ちゃって、こういうふうになるのがヤダーっと思って、こういうビデオを作った」

☆スナップ5

中3男子

タカピー「これはね、あれだね、鉄条網と檻っていうのは周りにいる人達が自分に期待することのプレッシャーで自分がそれに壁を作っているように感じて：」

ノブ「これはもう心の中に閉じた悲しい思い出：もう二度と出たくないようにぐるぐるまきになっている。：いや違う、わかった！檻の中にいるのは本当の自分で、この檻の外に

るのはただ人の言う通りに動いている」

ムラ仙人「この中にいるのは閉ざされた自分で：有刺鉄線とかは傷。」

宮田「有刺鉄線とかは誰が用意したの？」

ノブ「自分の心！」

☆スナップ6

ねこ娘 高1女子

ねこ娘「私はこの檻っていうところから、すぐ近くにいてけど何もしてあげられない、っていう：あゆが、その天使に：。多分自分のまわりの仲間、自分に共感してくれている人と

自分の内面を捉え掘り下げる「実感」の能力・3・

上原先生はこれらの座標軸についてこうも言っている。

「イメージの確定の仕方には何通りもある。時間・空間・人間（ジンカン）を確定することがイメージ力のもとだ」（平成六年十一月）

受験をはじめとして様々な壁にぶつかる中高生にとって「生きる力」を高める必要は多くの人が述べている。私はその力の根元こそがここで言う「イメージ力」と考え、その復元・増強を目標にして日々子ども達と接している。

思っているんだけど、その人達とか身近な人達：。あとね、もう一つはしてあげられないんじゃないかって、檻の中にぜんぶ自分の気持ちをしまいこんじやって自分で出す勇気がない。（この檻を作ったのは誰？）あゆの無意識？」

予想以上に自分が自分を取り巻く状況の意味づけを設定している主体であることを無意識ながらもキャッチしている意見が目立った。意識世界を設定している三つの座標軸への意識も子どもによってはかなり明確だった。

イメージ力が高まりさえすれば案外子ども達は細かく大人が関わりなくとも自分の生きる方向を見いだすし、成績だってひとりで伸びていく。これはイメージ力の高まりが自分の内面に向かえばそれが野性の高まりとなり、自己の内なる神性と巡り合わせるからとも言える。

この前提になるのが三つの軸を自分なりに確定することだと上原先生は指摘しているが、その基礎力として当然不可欠となるのが「自分の内面を捉え

る力」である。しかしこの力に関しては危機的な状況にあると年々感じている。

☆スナップ7

平成九年度 中1女子

この仕事を始めた頃にあつた六人一緒の時間の初回。国語などは得意と自負していた彼女たちだったが
宮田「優越感とか劣等感って言葉、知ってるだろ？」

「えー、そんなの聞いたことないよ。授業でもやったことない。」

宮田「じゃあどんな意味だと思う？漢字から考えてみてよ。」

「そんなのわかんないよー。習ったことないもん。」

☆スナップ8

平成十二年度 中3男子

宮田「心の中や気持ちを表す時に使う言葉にどんなのがある？」

「……そんな言葉あんのか？」

宮田「いつも使ってるじゃないか。学校の悪口を言う時だつて」

「え？ オレも使ってる？ もしかしてムカツとかキレルとか？」

この二つのスナップは決して特殊な例ではない。中三や高校生になっても「優越感・劣等感」という語句を知らない子、また知っていてもそれを使って

自分の心を説明できない子は予想以上に多い。「心や気持ちを表す言葉」と聞いかけられて「それ、何？」と首を傾げてしまう子も決して少なくない。また挙げることできたとしても語彙の数が極めて少ない。「例えばこんな言葉もそうだよ」と示せば「なーんだ、それも！」と言うが、結局感情用語としてきちんと意識化されていないのである。

これは優越感や劣等感という言葉を指導要領で教える事になっているとかいないとかの問題ではない。例えば優劣の意識は幼少の頃から中高生の時期にかけて最も人間を振り回す意識ではないか。そんな自分の精神状態を捉え整理し自己制御していくよりどころとなる言葉が獲得されない国語教育にどれだけの意味があらう。

ましてや母国語習得過程のまっただ中にある幼児期から早期英語教育などが施されなれば、今後さらに自分の内面への感覚の欠如した若者が続出しよう。ちなみにその危機について上原先生は「言語混血児を作つてどうするのか！」と訴えていた。母国語習得が日本人としての感情を整える事とどう関連するのにも先に紹介した「感情教育論」に詳しい。

そんな現状がわかつていながら、家庭教師としての限られた時間はどうしても数学や英語の指導に奪われてしま

う。頭では「受験勉強だから」と分かっているけど私も子ども達も何か満たされない思いがあつた。今年（平成十四年度）は自分の内面にウソをつけないタ イプの子ども達が特に多かったので十二月になって中3を中心に優越感・劣等感の授業を行った。どの家の子も最初は考える視点が定まらずにとまどっていたが、自分や周囲の友達の言動と結びついて考えるようになると堰を切つたように活発に意見を出し始めた。

☆スナップ9

平成十四年度 中3

この十月からゆでたまごと共に学ぶようになったバドさん、ちょうど内申書にからむ時期からだったので私の授業も毎回数学や理科を中心に普通の家庭教師っぽくなっていた。私が現れると「今日もまたか……」と疲れた表情で無言になっている事が目立っていた。冬休みになり初めて国語で感情を行うと二人とも大いに盛り上がり
「アー、何か今日は充実しているな！」と盛んに連発。その後の物語文の読解問題も調子よく出来た。

宮田「何か、いつもは充実してない授業をしているみたいだな」

バド「そうは言っていないけど……」（と笑つてごまかす）

バドさんが帰宅後、ゆでたまごさん

が教えてくれた。

ゆでたまご「あのさ、先生がちよっといなくなった時、こんなに充実したの初めて、って言つてたんだよ。」

そしてさらにしつかりとした口調で語つてくれた。

「私もちよっとこんなとこ机に向かつて勉強するのが辛くなつてただけで今日は充実した。明日からまたちゃんとできそう」

受験の追い込みになって私自身がつい現実には追われると子ども達の顔から充実した笑顔が消える。決して受験勉強という現実から逃げるわけではないが、こうした状態では子ども達はますます追いつめられて結局は進歩が滞るばかりでなく生きる気力そのものが低下する。みんな自分の内面を知りたがつている。それが知的作業ではなく「実感」を伴えば伴うほどこの例の様に「新しい自分と出会えた喜び」のような気持ちを抱く。上原先生の言葉にあつた「イメージ力のもと」というのを再確認できた。

自分の内面を振り返る上でもう一つ注意しなければならないのが「これが自分だ」と思っているものが本当に自分の心の中からわき上がってきたものなのか、他人や社会によつて汚染されたものであつたり借り物であつたりし

ていないかという問題である。そんなニセモノの内面を自分の本音と勘違いして三つの軸を確定させたとしても、それは真のイメージ力や後述する「生命の指標」ともなり得ない。だから「今思っている自分が本当の自分の気持ちだとは限らないんだよ」と常に本音の点検をするように子ども達には話している。

*上原輝男著「心意伝承の研究 芸能編」(桜楓社)の序章は「実感実証の学として」となっている。中でも今述べた事と関連が深いのが「折口信夫の場合五の部分であり、折口博士の」だから、まず正しい実感を、鋭敏に、痛切に起こす素地を大抵以上に作らねばならぬ。而も、機会ある毎に、此能力を馴らして置く事が肝腎である。」という言葉も紹介している。

内面が豊かな子どもほど受難の時代・4・

ここで自分の世界を持ち続ける事に大きくなくてもこだわっているまゆみ2002さんのスナップを二つあげてみる。

☆スナップ10

平成十年度 中3時

5歳児の頃、池に落ちた思い出を話してくれた。

まゆみ2002「庭に池があつたんですよ。ある時庭で遊んでいたらチョウチヨを見つけたんですね。それでちようちよを追いかけて、ハッと気が付いたら周りの世界がパッと変わって：分かります？ パッと周囲が変わってしまったんですよ！ そうしたら目の前に鯉がいてパッと目

があつたんです。それっきり何も覚えて無くて、気が付いたらお風呂場でたらいの中に入れられていたんですよ。」

この話を本人が失敗談とか恥ずかしい経験というような価値判断を伴わずに楽しそうに話していた事を付け加えていおきたい。この姿勢は子ども本来のたくましさの源である「マイナスイメージをプラスのイメージで包み込んで心にしまふ」作用を描いていると上原先生が評していた千葉県三の「たかのす取り」に登場する子ども達にも通じている。これも「野性」の一種ではないだろうか。

☆スナップ11

平成十三年度 高3時

携帯電話を持つてはいるがほとんど家に置きっぱなしでメールのやりとりもしないというまゆみ2002さん。わけを聞くと

まゆみ2002「だって邪魔じゃないですか。例えば私はライブに行くときは電車に乗っている時からライブを楽しみに行くっていう夢の気分であるんですよ。それなのにそんな時に誰かから電話がかかってきたら現実には引き戻されちゃうじゃないですか！私、そんなの嫌なんです！」

こうしたまゆみ2002さんの様に徹底して自分の世界を自分で守ろうとしている子どもは私の周囲ではあまりみられない。むしろ例えば家庭教師の授業をしていても追い立てられるようにメールを頻繁にやりとりしている子は中学生でもみられる。「後でいいじゃない」と言っても「すぐに返事をしないと相手にされなくなる」ということを盛んに心配している。

いじめによる仲間はずれば例外として、現代の社会では一人で静かにいる事を否定的に考えすぎているいだろうか。上原先生は「籠もるっていうのは中に入ってジーンと内部生命を温存して、いこうということだ」と話していたが、

帰宅してからも常に携帯が音を発している状況では自分の内面をじつくりと見つめるヒマはなからう。

☆スナップ12

平成十三年度 中2

便りの特集に書いた金八先生の主題歌スタートラインの歌詞に『1人ぼっちになるためのスタートライン』とあることについて。

ゆでたまご「ひとりぼっちになってみるのもいいんじゃない？ 自分の事だけ先ず考えられるから。そうすれば自分の事もよくわかるようになるし、自分が好きになれる。マア嫌いなところも出てくるだろうけれど長所と短所とどっちもよくわかるようになるし：。」

3番の『闇に向かって走りだすためのスタートライン』も問う。

ゆでたまご「：明るい夢だけだと目標がなくなるんじゃない？ やりたいことを見失うっていうか：やりたいことができなくなる。：暗い方も分かっておきたい。(そして笑いなながら)明るいだけじゃつまらない。夜がなくて星が見えないじゃん！」

*ちなみにこの子は天体写真などを撮るのが大好きな子である。このスナップには後述する「生命の指標」に関する言葉もみとれる。

児言態では以前「夢」と「現実」の意識が中学年の頃にひっくり返り、それが「ほけとつっこみ」という形で子ども達のやりとりの中に出てくるという事を扱った。（「国語の授業はこうするⅡ」）そこでも触れたが、中学年以降でも夢の世界を主体にして生き続ける子どもは自由自在に現実的な会話も使い分けられれば「おとほけ上手」として受け入れられようが、夢の世界に忠実な子どもはど一つ間違えると変わり者扱いされてしまう場合が多い。

☆スナップ13

平成十三年度 中2女子

一家そろって宮崎アニメが大好きなドラヤキアイスさんの最近の悩みは級友が芸能界やファッションの話題ばかりになったこと。

ドラヤキアイス「私、まわりから浮いた感じなんです。別に仲間はずれにされてるわけじゃないんだけど話に入れなくて…。みんなも芸能人とかに興味がないなんて変だ、変だって言うんですよ。先生：私ってやつぱりおかしいですかね……」

ドラヤキアイスさんもまゆみ2002さんの様に「私はこうなの」と自然に振る舞えれば悩む事はないのだが、実際には「自分が変なのかな」と悩む子ど

もの方が今の日本では多いようである。（気にしない子は極端に傍若無人になりがちでもあるが：）

小学校の高学年頃までに「気分のまま発せられる言葉」と「意識して操られながら発せられる言葉」の二通りがあること、さらに頭の使い方にも感情思考・イメージ思考・論理思考などがあることに気づかないでいると学習面にも目立って影響が出てくる事が多い。

☆スナップ14

平成十一年度 中2女子

理科の化学変化の単元でつまづいている。酸化の説明をしているときに「物が燃える時に何が必要だい？」と問うと

「マッチ？」

この子は大まじめである。しかし実感に素直な生活感情の世界に住んでいる為に、理科の学習につまづいた。もしこれが学校の教室だったらどうなっていただろうか。ひよつとすると実感から発した言葉が級友の爆笑と共に否定された事によって強烈な劣等感を刻印してしまったかもしれない。先生もこの子の意識世界を整理してやる事なしに、時間内に授業を進めることを優先し「何を馬鹿なこと言っているんだ」で済ませてしまう事も大いに予想される。

現在そんな中高生に対して児言態風の授業を必要に応じて入れているが反応は上々である。中高生だからこそ小学生よりもそうした授業の意義をすぐ実感してくれる。ただそれがそのまま日々の学習に反映するかどうかには個人差がある。それは本人の問題というよりも、その子を取り巻く人的環境によることが多い。

*こうした学習上の「齟齬」の問題については「内在価値を感じさせる国語教育の根幹」（山形大学小川雅子著 深水社）に詳しいので参照されたい。

子ども復活のカギとしての心意伝承・5・

家庭教師として関わった子ども達の中には学校の勉強には興味を持てず自分はどうせ出来ない」と諦めている子ども、時には生きる事への希望さえも失いかけている子どもも少なくなかった。そうした子ども達への働きかけとして現在最も手応えを感じているのが上原先生の専門であった「心意伝承」についての記事をなげかける事である。

☆スナップ15

平成十二年 中3

休憩の時にチャンプロードなる雑誌を見せてくれた。暴走族などに愛好さ

子どもたちの受難に追い打ちをかけているのが「絶対評価」の導入である。そもそも内面や根元に触れる部分ほど目に見える形で数値化し評価するのは無理な話である。そのためますますテストの数値をアップさせるために形式的に教え込む授業が横行しているのが現状ではないだろうか。まして教師の能力まで子どもたちの数値目標の達成度で測るような事をすれば、ますます内面に目を向けた指導は行われなくなる危険がある。

れている雑誌らしい。そこに載せられている数々の衣装や入れ墨などに強い興味を持つているようなのでぎくばらんに語ってもらおう。そこに心意伝承との接点が現れてきたので翌週、上原先生の「日本人の心をほどこ かぶき十話（オリジン社）や「心意伝承の研究」などを見せながら関連した文章を紹介する。

A「エー！ これ、今俺らが言ったことと同じなの？」と目を輝かせる。

宮田「そうだよ。しかもそれが日本人の心のナゾを説くカギでもあるんだよ。教わらなくてもちゃんとお前達

から出てきたら」

B「なあ、なんか俺らすごくねえ！」

これは暴走族やそれについて自分達が語ったことに通じる心象について「こんな難しそうな本にも書いてあった！」という驚きである。しかもそれが古来からの日本人の心の解明につながるというのだから二重の驚きなのである。

こうした事を通して遠い祖先から流れ込んでくるものが「自分の中にも確

かにあった」と自覚することは、自分を大きな生命の流れに位置づける働きをする。

*「心意伝承」という言葉を掲げているわけではないが、先に紹介した山形大学の小川先生は古典の心が子ども達の中に流れ込んでいる事を自覚させることによって内在価値に目覚めさせる実践を行っている。(参考「生きる力を発揮させる国語教育―内言を主体とした理論と実践―」牧野出版)

生命の指標(らいふ・いんできす)

・6・

折口博士は生命の指標(らいふ・いんできす)と古代日本人の靈魂観の関連についてこう述べている。「我々の古代人は、近代に於いて考へられた様に、たましひは、肉体内に常在して居るものだとは思って居なかつた様である。少なくとも肉體は、たましひの一時的假りの宿りだと考へて居たのは事実だと言へる。…人間のたましひは、いつでも、外からやって来て肉體に宿ると考へて居た。そして、その宿った瞬間から、そのたましひの持つだけの威力を、宿られた人が持つ事になる。又、これが、その身體から遊離し去ると、それに伴ふ威力も落としてしまふ事になる。」そして「たましひの純化という章にこ

う続く。「とにかく、所謂生命の指標

(Life Index)と謂われて居るものは、我が國の原始信仰に於ては、とうていあり、同時に、外來魂の常在所といふ事になるのである。これが、神道時代に這入ると、最平凡に考へられて、所謂神集るところなる高天原の信仰になつたのである。」(昭和六年「原始信仰」全集二十卷)

折口信夫事典(大修館書店)によれば折口博士はこの生命の指標(らいふ・いんできす)の語句を元々の意味よりかなり拡張して用いていたという。基本は「外來の魂が宿った物」とされるが、「咒詞や枕詞に神が宿る」「神の言葉のエッセンス」という様な意味でも用

いていたという。そして伊藤好英によれば「枕言(ライフ・インデクス)に宿った外來の靈魂を貴人に取り憑けることであつた。枕言を聞かせることによって、貴人の魂が成長する。これは本縁譚に関しても同様で、ライフ・インデクスたる歌または謠にまつわる物語を奏することによって、物語に籠もっている大事な魂が貴人に付く。そこにはおのずから教育的意義も生まれてくる。そのような方法による貴人の教育を、折口は感染教育と呼んだ」とある。

ここでいう貴人とは現実的に身分の高い人物というわけではなからう。折口学の貴種流離の点から言えば、貴い魂が現実の世では落ちぶれている仮の姿を現わしている事もあるからである。貴人と称されるか否かの基準は先述した「実感」の能力であらう。それは様々な事物に宿っている神の意志を感じ取れる能力、さらには後述する犠牲論での「恨み(裏見)」という特殊洞察「ができる能力に関わるためである。

*ちなみに私が学生時代に卒論で取り組んだのは幼稚園の創始者であるドイツの教育学者フレーベルだったのだが、彼の「万有内在神論」に基づく教育原理と折口博士の教育観には通じるものがあるように思う。フレーベルも万物に宿っている神性と子どもたちに宿っている神性との交感を通じて人間性を高

めようと考えた。

しかし現代においては折口博士のような「魂の入れ替わり」を教育の発想に直接持ち込む事には抵抗もある。それを「魂」という事を持ち込まずに教育学として扱えるようにするため、上原先生は「構えの変革」「世界定め」「トランスフォーメーション」などというこ

とを盛んに問題にしていたのであろうと私は考えている。軸の設定が変容した時に自分を取り巻く世界がそれまでとは違って感じられる。それを古代人は「自分の魂が入れ替わった」と感じ取ったのであろう。

こうした軸の設定の主体者は一人一人の人間それ自身である。そして目指す世界への羅針盤も地図も心意伝承によって生まれながらにして無意識の世界に持っている。ただそれは無意識の奥底にあるのでその存在すらなかなか自覚されない。我々はそれを知識ではなく生活を通して意識的に感覚を磨きながら掘り起こしていかなければならない。それがやがて「自分の生きる道を見つけた!」という実感へ結びつくのである。「心意伝承の研究」折口信夫の場合、はこう結んである。「…博士は柳田の直門としてこの実感を、鋭敏に、痛切に起していく。つまり、柳田以上に、心意伝承を体に関こうとしたといえる。

天眞以上に、ということばがそれをよくあらわしていると思うのである。」

そうしたことを私は「生命の指標（らいふ・いんできす）」は我が内にあり」としたのである。「神性と野性」も言い換えれば「神性は心意伝承によって生得的に持っている生命の指標」であり「野性は我が内なる世界に突き進んでいく」とする「生命力」となる。

上原先生は「上原は心意伝承研究の一方で子どもの研究をやっている、と言われる事があるが別々の事をしていたわけではない。同じ事をつかまえていようとしているんだよ。子どもはまだ大人ほど現実に無意識世界が汚染されていないからね。子どもは何でも知っているんだよ。」とよく話されていた。この言葉は単に教師や親だけが受け止めるべき言葉ではない。未来への方向を見失っている人類すべてが考え直さなければならぬ言葉である。

*昭和二十六年「神道」で博士は次のような言い方もしている。「古代における生活の指標（らいふ・いんできす）」が、その後、長く知識として傳つて来たもの、つまり古代においては知識であり、生活の指標であったが、それを目指して總ての人間がいきでゐた。それに人格的な内容を與えれば、神の心であり、神の教へであると言ふ様に考へて生きてゐたが…」（全集二十巻）こちらの訳

や説明の方が現代の教育論にはなじみやすいかもしれない。なお、常に実感を強調されている博士がここで「知識」と記述している事が我々が通常用いている「知識」と同義であるのかは注意を要する。

*心意伝承とユングの「集合的無意識」や「元型」との接点については上原先生も「心意伝承の研究」で簡単に触れられている。

*この報告文の原稿を書き上げて数ヶ月後の事なのだが「心意伝承の学としての定位——稚児の研究への布石」という國學院大學「日本民俗研究体系 第八巻 心意伝承」に上原先生が総論として執筆した論文があるのを知り初めて読んだ。先生のもう一人の師である郡司正勝先生を引用した部分があつたのでここで紹介を加えておきたい。

「稚児の研究を進めている途中、最近、郡司正勝の 童子考 が出版された。…郡司がこの書をどのような意図で著したかについては、そのあとがきでも明らかである。…」とこかで、サインが送られているのではないか、どこかに記号が付けられてあるのではなからうかという旅である。こうした冥界からの発信を装つた民意の底に沈んでいるという、地名のない巡礼回国の旅に似ていないこともない。」と。「」童子考」

は郡司正勝刪定集第六巻 上原先生が解題を執筆

後半になると今回の報告文と直接関わる内容が詳しく書かれていて「臆せずというなら、稚児に神霊を覗いているといつてもよいのかもしれない。そういう意味からでも、折口の「生命の指標（らいふ・いんできす）」という仮説の中に稚児は取り扱われるべきものだと思うのである。」などの記述がみられる。

5節で「子ども達の復活のカギとしての心意伝承」と書いたが、これが単に学校に適應するための動機付けの手段として取り上げたわけではない事は言うまでもない。究極の目的は自分の生きる方向そのものの羅針盤の働きをするものが生得的に自分の中にあることを自覚してもらう事にある。

平成十四年度に児言態では「身近にある神秘的場所に注目し、ふるさとの心を語る」という内容の研究授業を行った。現代では迷信とされるような生活習慣を残しているふるさとや、そんな地域で育つた自分に劣等感を抱かないようにという狙いもあった。それは無意識に伝承されてきている生命の指標さえも封印することになるからである。それに関してこの授業を参観された広島大学の難波先生はこんな事を評している。

「…あの教室が学校という封印から解かれ、タブーという封印かた解かれ、いろいろな封印が解かれてああなったんだと。逆に言うと私たちはそういう様々な封印の中に生きていっているんだと。だからここの授業がなぜ必要なのか。この内野の子ども達はこの授業がなくとも伝統の中に生きていくし…。でも何故この授業をしなきゃいけないのか。それはそうじゃない社会があるからなんです。そこに行かないでだめだからなんです。」

今私が教えている子ども達がいる地域にも伝統が根強く残っている。そこでそうでない社会に出ることに備えるために個々に語ってもらつた。そのうちのひとつが次である。

☆スナップ16

平成十四年度 中3

ドラヤキアイス「蔵が怖い場所だな。出てきそう。あそこはヘビがいるんだよ。妖怪も…見たことはないけど。…あとね…あつちからこつちに来る時通る十畳の部屋が何かくるんだよ。ゾツとする。…こつちは安心する部屋。向こうは（勉強部屋や寝室があるのに）安心しない。あつちは建てたばかりだから。前の台所をつぶして出来たから。…イメージとして残ってる。見たから、つぶすところ

を。なんか可愛そうで。」

内野小学校の子に「古い祠は壊したら」と問うてみた話を話すと

ドラヤキアイス「絶対ダメー壊したらダメだよ。ダメダメダメーうちもダメって言われているから。祠じゃないけど。：井戸。あっちにあるんですよ。あれは絶対に壊しちゃいけないって言われているんです。水の神様がいるから。」

宮田「もしずっと後の子孫がそれを壊そうとしたら？」

ドラヤキアイス「絶対出てくるね！前の日の夜に出てきて怒る。自分は何代前にここに住んでいた誰なんだ！って言ってから怒る。」

宮田「ちゃんと名乗りをあげてから語るんだ。あの世からきて名乗りをあげてから何か現世の人に伝えるっていうのは能の形によくあるんだよ」ドラヤキアイス「えー？ そうなんですか！（と嬉しそう）」

現在のメンバーの中で「生命の指標」が自分の中にあることを最も意識して生活しているのが高2のねこ娘さんである。彼女が高1の時に語ってくれた小学校時代の思い出をまず紹介したい。

☆スナップ17

平成十三年度 高1

ねこ娘「雨が降った次の日あたりにとか映るじゃないですか、水溜まりの中に空が：ちっちゃい頃天空の城ラピュタとか見たから：で、水溜まりを見た時に自分のこの世界でその雲を見た時にはラピュタは見えないかもしれないけど、この水溜まりの中の雲だったらラピュタがあるのかなーみたいなことも考えていたりして：。何かね、違う世界がありそうだって。で、なんか入れそうだなーなんて思っ、そーとさあ、足を水溜まりに入れてみたけど何も起こらなかった。あの、その世界に入るって言うか落ちるっていう感じ？空に落ちるっていう感じがあって、あー本当におっこちたら怖いなー、って思ってたんだけど、ちよつと期待があつてドキドキして踏み入れたんだけどなんにもなかった。」

こうした事を小学校一年の頃から六年生くらいになるまでいつも感じていながら水溜まりを見たり足を入れたりしていたのだという。

このことからねこ娘さんはたとえ現実にとどまるのが頭でわかっていても内なるイメージの誘いがあれば素直に従い、その純粹な夢の世界で楽しめる子どもだったということがわかる。そんな別世界と自由に行き来できてい

たねこ娘さんだからこそ高校生になった現在、次のような言葉が出てくるのだろう。

☆スナップ18

平成十四年度 高2

ねこ娘「私の中には振り子があるんですよ。現実的にいま風の女子高生っぽくしたいなーっていう気持ちや、勉強なんかどうでもいいって気持ちに流されそうになることがあつても、そうなるかと振り子がこっちに帰ってきて勉強が面白いつて思ったり、将来のことをきちんと考えようって思うんです。」

こうしてみると先述した「ぼけとつつこみ」の授業も単に言葉に伴う意識の違いや「言葉のやりとりを工夫する」と銘打った授業テーマ以上に、そうした工夫を通して「別世界と現実世界を自由に交流できる」力を高める側面こそが重要だったのだと気づかされる。別世界との交流がうまくいかなくならない人間は自分を見失う。現実世界だけに留まれば内なる「生命の指標」とは出会えずに現実に振り回された生き方になる。逆に別世界に逃げ込んだきりになると「ひきこもり」や、夢と現実の区別を失った問題行動・犯罪行為などを引き起こす。

上手に交流できれば生き方の指針や現実の困難を乗り越える力も与えられる。それは別世界を通過することで世界定め軸の設定が変化するためである。

☆スナップ19

戦争をモチーフにしたアニメ「対馬丸 さようなら沖繩」と「うしろの正面だあれ」を見比べて監督の意図を話し合った。対馬丸は最後に友や父を失った主人公が墓の前で母と泣いている場面で終わる。うしろの正面は焼け跡で死んだ家族の幻と出会った後、歩き出したところで終わる。（小6四名 中2五名）そこで出た言葉より

小6男子「最後の再会：空想でお母さんたちが見えた所で、生きる希望がわいてきてよかったなって」

中2女子「涙がとまらずの状態で：あ、お母さんたちがきて私も連れてって、って言ったところがジーンときたんですね：：そこでお母さんとか家族のみんなに言葉を言われてかよ子が橋を渡っている時に強そうな顔をして、お兄さんを見つづけたって言ってたから、かよ子は甘えん坊だったけど強い子だったんだなって。」

宮田「対馬丸のあのきよしはこれからどう生きていくと思う？ あのス

トから考えて」

中2女子「罪悪感とか…。自分が死んだじゃうのを恐れて、みんなが死んだことを誰にも言わなかったから。一人だけ生き延びちゃったし」

中2女子「いつまでクヨクヨしてしまいかかわらないけど…うしろの正面みたいには立ち直れないでひきずってしまおうと思う。」(本誌授業記録「はまへのいす」の児童の発表に夢を見て入院生活が変容するというイ

マジネーションの例があるが、これも同様の例といえよう。)

うしろの正面の主人公は「家族の幻」と会った後に橋を渡っていくという事から未来に向かっての意識の転換をすることができたが、対馬丸は現実的な悲劇のまま終わったから、その意識は変わらないままではないか、という風にそれぞれ感じ取っていた。なお橋に関しては本誌掲載の論文を参照されたい。

現実世界の位置づけ・意義

7.

「夢の世界」(別世界)と「現実の世界」は対立するものなのだろうか? 中高生と関わっていると受験指導などとの狭間で私自身も現実問題として対応が迫られる。自分本来と実感できる世界を大切にし、本来の学習は自分を豊かにしてくれるものと納得している子どもだからこそ、逆に現実対応で得点力を安定させるための反復練習や暗記学習などにはなかなか興味を示さない。

また様々な人間関係のトラブルに嫌気がさして、現実の世界から夢の世界へ逃避したいという願望にこり固まってしまうこともある。

さらにこのところの政治・社会・国同士の様々な問題に見え隠れする人間の

身勝手な姿によって、一度は大きな夢を描いていた子どもほど絶望感・無力感が強烈に心を支配してしまう。

そうした自分の存在意義までも脅かす様な不安定な状態は先に引用した折口博士の「宿った瞬間から、そのたまたしひの持つだけの威力を、宿られた人が持つ事になる。又、これが、その身体から遊離し去ると、それに伴ふ威力も落としてしまふ事になる。」という言い方に該当しよう。

思い通りにならない現実世界そのものを自分との関わりで位置づけ意義を見いだしてもらふ事の必要性を痛感していた。

そんな平成十四年十一月、大学1年

になり群馬で下宿中のまゆみ2002さんからこんなメールがきた。「最近自分の一生やりたい事や卒論の題材などをよく考えるんですけど…自分は変身、あとは移動する事又は移動時間が好きな事に気がきました。この3つ何か関連ありますかね?」そこでこの3つが世界定めの軸と関わる事や「かぶき十話」で上原先生もトランスフォー

メーションの説明に子ども達の間でかつて流行した「へんしん」の言葉を取り上げている事などを返信した。

それをきっかけに現在の教え子たちに「変身」についての意識を問うてみた。題材にしたのは三十年近くたった今なおシリーズが続いている変身ブームの先駆けである「仮面ライダー」と、輪廻転生を扱いながら幼児にも受け入れられている「セーラーMoon」である。上原先生は庶民のイメージでつくられたものであるから歌舞伎を心意伝承の素材とされた。それと同様の感覚でこの二つの番組は子どもたちにとっての普遍性に接触しうるのではないかと考えたのである。実際、いろいろな子ども達とのやりとりの中ではっきりと浮かび上がってきたのが「本地垂迹」「犠牲」「貴種流離」などに関わる意識であった。こうした発想が自然にわき上がったところに興味深い。

セーラーMoonに関して

☆スナップ20

中3男子

ゲームボーイ「(本当の自分である魂が)人の上に乗っかっている…人間を媒介にしているんだよ」折口博士の「日本人の靈魂観」にも関わる発言である。)

また数メートルの長さにつないだ自作の歴史年表の途中に書き込んでいる時に、巻いてある上下を指しながらゲームボーイ「こっちが前世で、こっちが来世。そんでもって、ここに見える所が現世なんだ。」(日本の絵巻物は、知らず知らずのうちにそうした時間性のイメージを作り上げている事がわかる。生活様式や習慣もすべて同様に「らしさ」の形成につながる。)

仮面ライダーに関して「仮面ライダーの正体が本郷猛なのか? 本郷猛の正体が仮面ライダーなのか?」との質問に

☆スナップ21

中3男子

アントラース「仮面ライダーが正体だと思う。…運命が受け継がれたんじゃないの?…命に出会う…違った

自分なんだけど、でもこっちが正体なんだ」

☆スナップ22

高1男子

怪力バード「無理矢理させられたんだから、本郷猛の方が正体」

この「無理矢理」という話を受けてねこ娘さんは「災難」と「使命」の関係に話が進めた。セーラーMoonも最初は

悪と戦う使命をおびた事を災難だと捉えている。ウルトラマンも主人公は事故にあって命を失う事がきっかけで特殊能力を得て常人ではできない使命を担うという話題になった。そして最終的に至った事は

☆スナップ23

高2

ねこ娘「イエスキリストもそうですよ」ということであった。

変身ヒーローとキリストを同一に論じるのは不謹慎だが、ここに現れているのは上原先生の言うところの「犠牲論」である。先生の言葉をいくつか挙げておく。(日本教育史特殊講義録より)

*犠牲・生け贄は同時に神の乗り移った神格を表わすもの。そこに身替わりと

いう発想が生まれる。私が彼の身替わりになるっていうのは私と彼が同格にならなければ身替わりにはなれないんですよ。それが神人交感っていうことなんです。

*私の言うところの犠牲者とは、つまり神への生け贄たりうる人間であるということですよ。原爆で焼け死んだから犠牲者だ、という意味ではないんですよ。神に召される、つまりマークされた人間であるということです。

*恨みとは「裏見」だったんですよ。そして裏を見るというのは心を見ることなんです。表面じゃわからない、心を見るのが裏見だったんです。そしてその恨み(裏見)出来る資格として犠牲者とならなければならなかった。犠牲者となり得た時に恨み(裏見)する条件が整ったというふうに解いたわけです。そういう約束がどうあるように思われる。

これをもっと広げても案外通用する。つまり日本の芸能なんかはだいたいこの形をとっている。極めて苦難をするわけです。苦行をするわけです。苦行修行しなければ悟りは開けない。で、悟りを開いたら何が出来るかということそれは「裏見」ができたということなんです。別の言葉で言えば身を責められる。そしてついにそれは犠牲となってしま

う。

の「裏見」の力を「特殊洞察能力」とも呼んでいるが、これは先ほどから述べてきている「実感する能力」とも通じている。子どもたちに即して考えれば、先述したような「内面が豊かだからこそ受難」という事や、普通の子が単純に見過ごしたり軽く受け流したりしてしまうような事でも深く捉えてしまうからこそ逆にストレスやトラブルを呼び込んでしまう形になってしまふ事がこの先生の言葉に当てはまるだろう。

高1りさプーさんと話し合っていた時に出てきたのが「何故古代月世界のプリンセスの生まれ変わりである主人公の月野うさぎがドジで勉強が苦手で泣き虫で……という設定にされたのか」という事だった。およそセーラー戦士のリーダーなどという格の高い魂の入れ物とはなりそうもない人物として描かれているのである。(昔話に登場する特殊能力を持った子供が見た目には逆の姿というパターンを日本人が持っていることは柳田國男も「桃太郎の誕生」などで指摘している)

こう設定する事に作者が深い意図をもって考えていたことは原作に月の女王のセリフとして「あなたしかいないの! 幻の銀水晶の真の力を使ってあれを封印できるのはプリンセス! あなただけなの!」プリンセスであり正義の

戦士セーラーMoonであることに誇りと自信をどうかもって。そして忘れてないで……あなたがひとりの女の子であるということも。あなたが生まれ変わった本当の意味もそこにあるのだから」とあることからもわかる。高貴な魂が乗り移るものだから人間離れた神聖な生活を心がけなさい、と言っているのではないのである。ごくありふれた生活を大切にと設定されている。をそれは何故か?

こうした課題が出てきた矢先の事である。かつて教え子だった聖良さん高1)が火事に巻き込まれて亡くなってしまった。そしてその事をきっかけに個々人が「悩みや苦しみをばかりの人生の中で使命と出合い生きがいを見いだす視点」からの真剣な形での意見のやりとりとなった。世界定めの話は、ややもすると「見方考え方をどうかえればいいのか」を知的な操作方法として受け止められがちである。それが「日々の生活での体験を通して追求していく」という方向で本音を交えての語り合いになったのである。

やがてそれは「貴種流離」と「犠牲論」を結びつけていく発想につながっていったのだが、話が深まった分、それだけの子どもたちにとってさしさわりのある内容もあるので今ここでそのやりとりを紹介することはできない。次に

あげる「心意伝承の研究」からの抜粋で
どんな話題が展開していったのか察し
て頂ければ幸いです。

*「貴種流離」とは折口説の卓越したイ
メージパターンの指摘であった。貴種
は死なない。衰亡流離はあっても絶命
はなかったことを意味していたのだ
と今になって思う。博士は「一方」一家系
を先祖以来「人格」の思想を明らかに
されたがそれはおそらく貴種流離の心
象風景を生む基礎であつたのかもしれ
ない。

*貴種流離の残像は、寵童の故に逆境に
流浪する運命へと誘うのではなかつた
ろうか。…その終局面こそ、人の世に苦
悩する人間が神仏への昇華の時間…

*（本地物語の発想について）人間界を神
仏の前世として捉えている意識があり、
輪廻転生の本地としてこの世を観る立
場は厳然としている。従って主人公へ
の危害の増大は、より威力ある神仏へ
の転生を約束する代償の確認であつた
筈である。

日本神話では貴種流離の型が多く登
場する。それを古事記研究をライフ
ワークとしている私の父は貴種と限定
せずにすべての人々に適応して考えて
いる。神話が生きていた頃の「失敗や苦
難を通過する（くらげなす漂える時」
「黄泉の国」を通過する）事が真実の自

分に目覚める道。その喜びを得られる
様に神様は思い通りにならない現象世
界を創造された。」という常識が復活す
ることで、「失敗だらけの自分はダメな
人間だ」「自分には勉強にも運動にも才
能がない」「恵まれた環境にいない」と
絶望している今の子ども達がどれだけ
救われるか、と繰り返し訴えている。
（注 別に無理矢理苦難に満ちた生活を
送らなければならないと説いているわ
けではない）

実際にこの一ヶ月あまりのやりとり
を経て「どうして自分ってこうなんだ
ろう…」と自己否定に陥っていた多く
の子が失敗だらけだった今までを自然
に受け止められるようになってきた。
歌舞伎ではないが「いまの自分は世を
忍ぶ飯の姿」と納得し、こんな現実の中
でも時期が来れば本当の自分を発揮し
てやるぞ、という気持ちに変化しつつ
あることを本人達も自覚している。

*この点で「心意伝承の研究」の「助六
の紙子と鉢巻き」という章に述べら
れている事は特に人間関係で自分の不
遇を嘆く現代人には大切な示唆を与え
ている。「…助六実は曾我五郎というの
は逆転しているのであって、曾我五郎
が助六に憑依するのが本来でなくては
ならなかった。…曾我五郎が霊的存在
であるから助六に憑依する。…助六は
（敵役の意休からの）屈辱に耐えた。む

しろ、屈辱に耐え抜いたから紙子の自
縛が解けたように破れたとすべきなの
である。つまり屈辱に耐えるべき時間
は満期満了したのである。…意休は助
六の物忌みの執行人であつた。…意休
はこのとき、意休の格以上の白髪の翁
（神格）に飛躍していたのである。助六
に曾我五郎の霊を付与する権能者で
あつたということである。」

この中にある「意休は物忌みの執行
人であつた。…霊を付与する機能者で
あつた」「耐えるべき時間は満期満了」
という視点も現代の教育が忘れた視点

おわりに — 子どもは帰る場所を求めている —

かつて上原先生が今後の抱負として
こう話していた。

「僕も研究を追いつめたところでもっと
やりたいことはあるのよ。研究授業で。
それは最終講義で言つた かいまみ
なんですよね。子どもはどんな か
いまみ をしているのかを突き止めたい。
私は見たんだ、つて。でも、お母さん！
お母さん！私は見たんだ！つて言えな
い。まさか子どもがそういう気持ちで
いるということに大概の親がそういう
ふうにとつてくれないからね。だから、
秘密にしておこう、つてことになる。だ
け子どもはかいまみしている。それ

ではないだろうか。失敗も困難もない
のがいい、すぐに形が整うことが優れ
た教育方法…とする風潮は危険である。
まして学校のみならず国際社会も邪
魔者はいなくなればいいという論理が
まかり通っている現代である。無法を
無条件に許すわけではないが、敵さえ
も自分を高める糧とする古の姿勢には
学ぶべき点がある。（これと同様の事は
聖書も説いている）そうした和合の実
現には「時期をじっくりと待つ」必要も
ある。「待つ事の意義」を忘れてはなら
ない。

は日本人が持つていた共通感覚の根元
だもの（平成七年）」
そこでスナップ1のデジモン君を包
み込んで御両親の姿勢が改めて浮
かび上がってくるのである。生命の指
標など心意伝承に関わる事柄は決して
特殊な人間だけが持ちうるものではな
い。しかし、現実には幼い時代だからこ
そ現実的に余計なことを気にしないで
自然に飛び出してくる神人交感に關す
るような言動は否定されてしまいがち
である。早期教育を気にする親ほど「早
くこんなバカな事を言わないようにさ
せなければ」とムキになる。

そのように現代の多くの中・高校生が幼小時代に自分が自然に発した言葉を否定された経験を持っていると思う。それを覚えていないか否かに関わらずそれを引きずってしまった子どもが人生や学習の本当の意義を見いだせずにいるのではないか：神性と野性が喪失されているのではないか：そう考えているのである。

そんな中高生たちには今までの幼い頃からの経験をじつくりと振り返り、自分の軸のとりかたやイメージ世界を点検することを勧めている。そして真実の自分に自信を持って世界定め軸の再設定をするよう助言している。

先日、上原先生の「世界定め」の言葉を紹介しながら軸の設定の話をしていた時に急に力説を始めた子がいた。

☆スナップ24

中3

ゆでたまご「そう！ 小さい時が大事なんだよね！ 小さい時に何をやるかによってすっげー変わるもん。」

そして私が小さい時から運動が苦手でクラスでいじめられていた事を既に知っていたので私の軸のとりかたについて

ゆでたまご「先生は軸をとるときは視野が狭かったんだよね。：ああ、広げようともできなかったんだよね。」

だが実際のところ私が設定の軌道修正を勧めてもなかなかそうした気持ちになってももらえないのが現実である。この時にゆでたまごさんに指摘された過去の私の様に、視野を広げ軸を設定し直そうとする気力すら失っている為である。私の場合は自分への諦めが強かったが、今の子どもたちは心が疲れ切っているために改善に向けて消極的であるように見える。何をするのも「面倒くさい」のである。

仮に一度は設定の軌道修正が出来て、良い方向に自分が進み始めた事を自覚した子どもでも良い状態が続くとは限らない。また何か壁にぶつかると、多くの場合は「やっぱり自分はダメだ」と諦められてしまう。これも諦めた方が楽だと口にする。

学校でさんざん現実対応に追われ帰宅後も、今度はまた親から現実対応を突きつけられる。唯一の居場所である自分の部屋には家庭教師という部外者が乗り込んでいくのであるから私も相当罪な仕事をしている。「もう自分のホッと出来る居場所は布団の中だけだよ」とポツリと言われると切なくなる。

しかも学習に対して几帳面な子どもなどは勉強を切り上げて就寝することに罪の意識を抱いて床に入ると言っている。ましてや「もう寝てしまうの！」と親に叱られながら床に入っては寝入

りも悪いし目覚めも不安定だと訴えている。

上原先生が「家に帰る」ということこんな事を話されたことがある。

「帰るってことをもって考えなくちゃだめだ。鶏のヒナがかえった、って言うでしょ。元来が 生まれるっていうのと同じなんだからね。だから「帰る」っていうのは蘇生でなくちゃいけないんだよ。うちに帰って蘇生するんだよ。」(平成二年度)

また児童の言語生態研究十五号の「おふくろの世界——おうち」「におい」作文に見る時間と空間——」に引用した次の言葉もある。

「家は母体であり休む場所なんだよ。「やすむ」とは「いやすむ」であり(注「やすむ」は生命力を表わす音として捉えている)「いのち」が「澄む」、つまり生命がより純粹に清らかになっていくのが家なんです。」

家が家としてのイメージ空間を取り戻し、純粹な状態で眠りにつけるようになることが「野性」を高め「神性」へと迫っていく基本ではないだろうか。それは無意識世界からのメッセージを最も得られるのが「夢の世界」と思われるからである。

同じく十五号に掲載されている「子どもと夢——夢は体感とともに在り——」を上原先生はこう結んでいる。「：子ども

もたちにとっては決して夢と現実との関係というより、夢そのものが、生きることの指針を示すものとする根元があるのだといわねばならない。つまり夢より発し、また夢に帰って行く、生命の羅針盤の働きをするのが夢なのであるうか。」

最後にねこ娘さんのスナップでこの報告をまとめた。

☆スナップ25

平成十二年度 中3

ねこ娘「私って疲れるから寝るんじやないんですよ。夢を見たいから寝るんですよ」

生命の指標(らいふ・いんできす)への感覚が鋭いはずである。

*追記 平成十五年十一月に小川雅子先生の三冊目の著書

「言語表現力の構造と育成——内的言語活動を主体とする理論と実践——」が出版されました。